

永明延壽の淨土思想

服 部 英 淳

延壽は唐末五代の人、天台徳韶のあとを受けた法眼宗の正嫡であつて、その思想は一般に事理雙修、禪淨融合などと呼ばれているが、かつてその代表作たる宗鏡錄百卷を検討して、大正大學學報第十四集に私の所見を述べたことがある。特に禪淨融合といわれる淨土思想に關しては、その著萬善同歸集や神棲安養賦、智覺大師自行錄等に明らかなごとく、究極に於いては稱名念佛を實修して報土往生を願つたのであつて、慧遠、善導、慈愍等と並んで蓮社五祖または七祖の一人に數えられたことは周知の通りである。しかもこの思想と永明道場に於ける實修は、宋以後の中國佛教の有力な教學的基盤となり、靈隱寺や淨慈寺のいわゆる杭州五山を中心に各地に作られた雲棲株宏などの蓮堂において、廬山慧遠と共に兩大師と仰がれ、廬山念佛として傳承して來たのである。その淨土觀は、いうまでもなく唯心淨土と名づけられているものであるが、こゝでは唯心淨土について私の所見を述べ、結論的に延壽の淨土思想を考えて見たいと思う。

法然上人は選擇集の終りに「偏依善導一師」と明記しているものであるから、善導大師の教學を絶對的なものとして淨土宗を開創されたことは明らかであるし、その大師の教學は、一言でいえば、本願稱名の念佛によつて、凡夫（一切衆生）が指方立相の報土に順次往生すると説くのである。指方立相の淨土とは、いうまでもなく、西方十萬億の佛土を過ぎた彼方に實在し、阿彌陀佛が教主として現にましまして説法したもう事相の莊嚴淨土である。

しかるにこの指方立相の淨土に對立するものとして、己身の彌陀、唯心の淨土の説がある。一般に事相の淨土は機根の下劣な者のための方便説であつて、實理の上からは、淨土は唯心以外の何物でもないとし、指方立相と唯心淨土とを對立の關係に置くのみならず、唯心淨土を第一義眞諦門とし、指方立相順次往生の教を第二義俗諦門とし、後進性を持つもの、あるいは傍系淺釋のものとして取扱われているように思うが、はたしてそうであらうか。

唯心淨土といつても種々の説があつて、淨土思想全般に關することであるから、今こゝで詳説するいとまはないが、望月佛教大辭典には己身彌陀と唯心淨土の二つの項目をかくげている。この項目は三十餘年前にたまたま私が執筆に當り、望月信亨博士が閲讀されたものであるから、便宜上その大體を紹介しよう。まず唯心淨土とは、淨土を唯心の所變、または衆生の心内のものとする説であると定義し、最初に善導大師の弟子で慈恩大師窺基に唯識を學んだ懷感禪師の釋淨土群疑論を引用している。それによると、觀無量壽經には是心是佛といふ、起信論には心生ずれば諸法生じ、心滅すれば諸法滅すとあり、維摩經にはその心淨きに隨つて則ち佛土淨しとある如く、唯識の理論からいうと、自心に佛や淨土の影像相分を變作して之を觀するのであつて、佛も淨土も共に心外の法ではなく、唯心所變であると説いていることを紹介している。次に天台の説をあげ、摩訶止觀に基づき、いわゆる介爾

だも心あらば一念三千であつて、陰妄介爾の一念心に十界三千の性相を具足し、佛界乃至地獄界の十界は皆この一念心中に本具するのであるから、従つて淨土も亦心外の法ではないと説いているとし、慈雲遵式の往生淨土決疑行門や四明知禮の觀無量壽經疏妙宗鈔、及び元照の觀無量壽佛經義疏などを引用している。また次に禪家では、維摩經の心淨土淨説や楞伽經の心性説に基いて、直ちに心性を悟了すれば即ち即佛で

あり、自己の心性を明らかにするところ即ち是れ淨土であつて、これを身外に求むる如きは迷人の爲す所であると主張していることを紹介し、六祖壇經等を引用している。さらにまた、元照や延壽の著作、あるいは樂邦文類の唯心淨土文等を引き、祖師禪の唯心淨土説に對する批判もあることを述べているのである。

辭典としてはこれで一應の説明になつていゝと思うが、この中に掲げた諸説は中國のものに限られていて、日本天台や密教關係の説はあげていない。特に密教では、彌陀といふ、極樂といふのも、己身や娑婆を離れて別に求むべきでなく、彌陀は己心中の阿字の變成であり、行者の所居がそのまゝ極樂であるが、機根下劣の者をして心内の淨土を開顯せしめんがために、西方に即して十方に遍在する密嚴淨土を覺知せしめるのであると説くようである。これも勿論いわゆる唯心淨土説である。

しかるに各種の唯心淨土説をよく検討してみると、果して唯心淨土といわれるものが、善導大師の指方立相の解釋と對立するものかどうか。逆にいえば、指方立相が唯心淨土説を拒否しているかどうか、これは充分に考へて見なければならぬ問題であると思う。元來淨土は穢土に對するものであつて、大乘の菩薩が淨佛國土成就衆生の理想のもとに、いわゆる總願別願の誓願をおこして、自利利他覺行窮滿して淨土を

莊嚴し、究竟成佛すると説く。これは般若諸經典を始めとする大乘佛教の通念である。すでに過去久遠の昔から無數の菩薩が菩薩行を修して、現に成佛して十方の世界に各々その淨土を莊嚴したもうというのであるから、淨土はもともとの後の三身説という報身報土の性格をもつて、本生説話の形式で説かれたものであることは一々典據をあげるまでもない。また四諦でいえば、この穢土は業因縁によつて緣起された輪廻轉生の世界即ち苦集二諦の出世の因果であり、淨土は滅道二諦の出出世の因果、即ち菩薩道によつて酬いられた滅諦涅槃界であり、勝過三界の道である。これによつて、應佛釋尊の本質を考察して眞身應身が論ぜられ、穢土出現の釋尊と、その眞身たる永遠不滅の佛身との關係について、あるいは心淨土淨説となり、靈山淨土等の説となり、蓮華藏世界となつたのである。

私が他の機會にしばしば論じているように、龍樹は大智度論や十住毘婆沙論等に、とかく他方淨土を否定するものとして取扱われる般若皆空の説について、空の論理は決して業因縁、三世の因果を否定するために説いたのではなく、往生淨土のために執着を離れしめんがためであるといふ、無量壽經や阿彌陀經を引用して阿彌陀佛を讚歎し、般舟三昧經によつて念佛三昧の法を説き、肉身を捨てゝのち諸佛の家に入るべきことを勧め、易行道を開顯したのである。この般舟三昧經

に、「相と取るを痴となす」といふ、是心是佛といつてゐるのは、この淨土の莊嚴相は三界執着の有相でないことを明らかにし、報土の本質を示したのであつて、善導大師の指方立相の根據となつた觀經像觀に「諸佛如來は是れ法界身なり、遍ねく一切衆生の心想中に入りたもう。この故に汝等心に佛を想う時、是の心即ち三十二相八十隨形好なり。是の心、佛を作り、是の心、是れ佛なり。諸佛正遍知海は心想より生ず」というのも、同じ意味で今の般舟三昧經の是心是佛を襲うものと見られる。しかもこの念佛三昧は文殊般若經に「相貌を取らず」とある一行三昧と矛盾するものでなく、決して報身報土を否定したのではない。むしろ事理相即し色心二なる指方立相の世界の眞相を明らかにしようとしたものであると考えるのである。（大正大學研究紀要第四十八集、拙稿參照）天台大師は阿彌陀佛の淨土を凡聖同居土と判定されたが、これは觀經等の説相の上から名づけられたもので、般舟三昧經によつて常行三昧を説き、文殊般若經によつて常坐三昧を説いてゐることゝ矛盾せず、前に引用した一念三千の説も報身報土の眞面目を示すもので、後世理解されるような唯心淨土説ではないといふべきである。

また唯識家における心外無別法は事相の淨土を否定するように見えるけれども、無着は攝大乘論の中に十八圓淨を説いて菩薩酬報の報土の本質を明らかにし、世親もこれに基づい

て往生論に三種二十九句の莊嚴を説き、この莊嚴功德成就
菩薩の後得智たる大慈悲出世の善根より生ずといふ、またこ
の三種の莊嚴は略して説かば一法句に入るといふ、眞實智慧
無爲法身であるといつてゐる。また同じく世親の法華經論に
は、大火に毀れざるは報佛如來の眞實淨土にして第一義諦の
攝なるが故なりといつてゐるのであつて、心外無別法といつ
ても相分を離れて能縁の見分がある筈がなく、見相二分は自
證分を離れたものでないことはいふまでもなく、唯識法相家
が兜率往生を願つたことと矛盾しない。善導大師の後繼者た
る懷感禪師が唯識によつて淨土を解明したのは、唯報非化を
強調した師説に背くものではなく、これによつて當時の諸の
疑問や誤解を懇切に氷釋しようとしたのである。阿字の變成
たる事相の淨土も、第一義諦の所攝たる報佛報土を密教的に
表現したものに外ならない。

このように考えてくると、唯心淨土と一般にいわれている
ものは、彌陀の淨土を含めて、指方立相の十方淨土に先行し
たり對立したりする思想ではなく、むしろあとから報佛如來
の眞實淨土の本質を明らかにしようとしたものといふべきで
ある。善導大師の觀經疏定善義に、

「是心作佛と言ふは、自の信心によりて相を緣すること作の如
し。是心是佛と言ふは、心能く佛を想すれば、想に依りて佛身現
ず。即ち是の心、佛なり。此の心を離れて外更に異佛なければな

り。諸佛正偏知と言ふは、此れ諸佛は圓滿無障礙智を得るを以つ
て、作意と不作意とに能く偏ねく法界心を知りたもう。但だ能く
想を作さば、即ち汝が心想に従つて現じたもうこと、生ずるに
似たりということ明かす」

といふ、また

「或は行者あり。此の一門の義を以つて唯識法身の觀と作し、或
は自性清淨佛性の觀と作すは、其の意甚だ錯れり。絶えて少分も
相似たることなし。既に像を想えと言いて三十二相を假立せる
は、眞如法界身、豈に相あつて緣すべく、身ありて取るべけんや。
然るに法身は無色にして眼對を絶す、更に類として方うべきなし。
故に虚空を取りて以つて法身の體に喩う。

又今此の觀門等は、唯だ方を指し相を立て、心を住して境を
取らしむ。總べて無相離念を明かさず。如來懸かに知りたもう。
末代濁惡の凡夫の、相を立て、心を住するすら尙得ること能わす、
何に況んや相を離れて事を求めば、術通なき人の、空に居して舍
を立てんが如しと」

とある。つまり善導大師は充分本質論を承知の上で、五濁の
世、無佛（釋尊入滅以後）の時に、罪惡生死の凡夫が如何にし
て救われるかを問題にしているといふのである。そして一切
衆生が悉く成佛すべきであるという大乘の理想に立つて、諸
佛が菩薩の行願を成就して莊嚴したもうた報土に順次往生す
ることが、龍樹世親に貫かれた菩薩道實踐の本來の姿である
と確信されたのであつて、本質論を否定したり、それに對立

するものとして指方立相を主張しているのではないといつてゐるのである。大師の師たる道綽禪師が聖道門と淨土門の二門を教判とされたのに對し、大師はあえて聖道門を菩薩藏漸教とし、淨土門こそ菩薩頓教であると強調されたのは、このような意味であつたと考えられる。

しかるに善導大師等の指方立相の彌陀淨土教に對し、正面から批判を加えたのは、六祖慧能系統の祖師禪である。維摩經に心淨則土淨とあるから、娑婆即淨土であつて他方に淨土を求むべきではないし、楞伽經等によれば、この心は如來藏自性清淨心であるから、直ちに心性を了すればそのまゝ淨土である。西方を願うが如きは、月を指す指に執着するものである。文殊般若經に相貌を取らずといふ、觀經にも是心是佛とあるではないか、といつて、はつきりと西方淨土のみならず十方淨土を拒否するのである。その當否は兎も角として、これこそ佛教の流傳の上にかつて見ることの出来ない獨特の解釋であつて、まさしく唯心淨土と名づけるにふさわしいものである。現代一部の人々の間に行われる淨土の新しい解釋と稱するものは、おおむねこれに類似的の傾向があり、一般の人々には受入れやすいようである。その詳細は省略するが、之に對して慈愍、法照、延壽等は、これらの主張が片寄つてゐることを説き、指方立相、事相淨土の本意を誤つてゐると批判し、偏禪を戒め、事理雙修の主張となつたのであつて、

延壽等はこのような意味で唯心淨土という言葉を用いてゐたと見られるのである。元照も觀經義疏卷上に、

「嗟、今の末學は唯心に達せず、但だ點靈を認めて便わち淨土と爲し、自ら謂う、心淨ければ土淨し、他求を假らず、佛即ち我が心なり、豈に外に見むるを須いんやと。彌陀を指して外物と爲し、極樂を貶して他方と爲す」

といつてゐる。従つて中國の人々には、廬山慧遠も善導も、慈愍も法照も、延壽も省常も、等しく蓮社繼祖であり、同一線上の人として矛盾を感じなかつたのである。この觀點からいへば、慈愍や延壽を一般に禪淨融合と呼んで來たのは嚴密な意味では適當でない。かくして延壽は、圭峯宗密、華嚴澄觀、天台德韶等の影響を受けて、華嚴のいわゆる總該萬有互有の一心を宗として萬善同歸を説き、偏禪を戒めて事理雙修を勧め、その四料揀の中に、禪にして淨土を兼ねるは虎に角があるようなものであるとし、現世では人々の指導者となり、死後は淨土に往生すべきであると説き、自ら一百八事を修して西方往生を願つたのである。

かゝる性格を持つ近世の大陸佛教が、指方立相有相但着を宗風とし、本願稱名による單信直入を實踐する法然上人門流の宗義形成に、色々な形で影響を與えてゐるのであつて、鎌倉室町を通じて純禪の人々との間に激しい對立を経た後に、室町末期以後は、むしろ本質的に相許す傾向があるに至つた

のは、上述のような根據があつたからである。昨年度の本大會でもふれたように、例えば縁山志によると、關東十八檀林の中心であつた増上寺の學寮について、慶長の頃、すでにその制度は曹洞宗の學寮梅檀林と殆んど同じであり、どちらが眞似たのか解らないが、互いに交渉を持つて同學していたと記録して居り、しかもこの檀林の學風を作つたのは安譽虎角という人で、その師道譽貞把は、彼れが淨土と禪に通じていると賞讃して虎角と名づけたという。この名は延壽の四料揀に出ている虎角の喩によつたものであろうし、虎角の四義説を注釋した宛然古轍は、洞山五位説を解説した鼓山元賢の洞上古徹にならつたものであることは明らかである。(淨土學第二十九集、拙稿參照)

以上、とかく誤解されやすい指方立相論と、いわゆる唯心淨土説との關係について私見を述べ、結論的に、中國宋以後の淨土教の基盤となつた延壽の淨土思想を考察したのである。

(昭和四十年年度文部省綜合研究費による)

執筆者紹介(四)

大類	純(東洋大學講師)
伊藤	宏見(東京農業大學講師)
鑑本	光信(福井工業大學講師)
藤田	清(四天王寺學園女子短期大學教授)
平川	彰(東京大學教授 文博)
定方	晟(東京大學大學院)
高崎	正芳(花園大學講師)
松長	有慶(高野山大學助教授)
長崎	法潤(大谷大學助手)
金岡	秀友(東洋大學助教授 文博)
櫻部	建(大谷大學助教授)
服部	正明(京都大學助教授)
高崎	直道(駒澤大學講師)
早島	鏡正(東京大學助教授 文博)
雲井	昭善(大谷大學教授 文博)
山口	惠照(大阪大學教授 文博)
壬生	台舜(大正大學教授)
芳村	修基(龍谷大學教授 文博)
宮本	正尊(駒澤大學教授 文博)